

平成21年度学校体育振興事業

「中学校武道必修化に向けた地域連携指導実践校」

研究報告書

ふりがな 学校名	とよはししりつなんようちゅうがっこう 豊橋市立南陽中学校
-------------	---------------------------------

校長名：鎌田 孝一

所在地：愛知県豊橋市駒形町字南欠下1の1

電話番号：0532-48-5620

中学校保健体育科における地域人材の活用  
の研究

I 研究実践校の概要

1 学校・地域の特色と実態

本校は、愛知県南部の渥美半島のつけ根に位置し、従来の農村部と市街化が進んだ住宅、大型店舗が混在する振興地域にある。

学校も創立して25年と新しく、伝統的な学校文化を創造するために、学校祭・長距離歩行の行事を柱に生徒主体の計画・運営を心がけている。

2 学校の概要

		1年	2年	3年	特別支援学級	計
配当時間		6	6	5	2	19
生徒数	男	102	81	96	3	282
	女	79	91	95	1	266

教員数 35名（保健体育科 3名）

武道の授業の状況

領域：武道 領域の内容：剣道

		1年	2年	3年	特別支援学級	計
配当時間		10	10	10	0	30
配当教員数 (外部指導者)		2 (1)	2 (1)	2 (1)	0 (0)	3 (1)
生徒数	男	100	83	96	0	279
	女	77	88	95	0	260

II 研究の内容及び成果等

- 地域指導者の剣道指導を国際理解教育と関連させて位置付けたことにより、日本文化をより身近にとらえることができた。
- 地域指導者とのTT指導により、武道（剣道）の専門性を高めることができた。また、教員にとっても具体的な指導法を研修する場になった。

1 研究の推進

(1) 研究主題

生徒一人一人の技能および精神の伸長を図る保健体育科の武道指導  
—地域指導者と連携した武道（剣道）の授業実践を通して—

(2) 研究主題設定の理由

本校区では、地域スポーツクラブ活動も軌道に乗り、学校部活動もボランティアが指導にあっているケースも見られる。こうした流れは総合的な学習や図書館指導にもあり、地域の人が学校教育にかかわる機会が増えた。しかし、保健体育科の武道などでは、教員にも剣道や柔道の有段者は少なく、例年形式的な武道の授業に終始していて、十分な学習の成果を上げることができなかった。

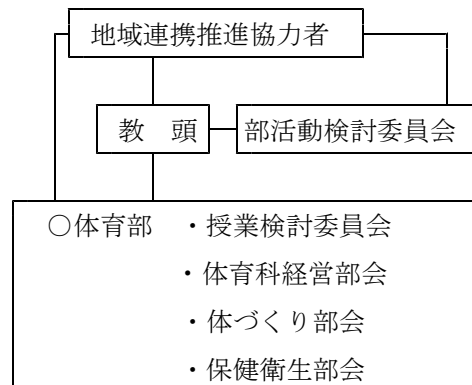
武道指導を、地域指導者とのTTで指導を行うことで、生徒一人一人の運動特性を把握した上で、武道の技能も向上させることができるのではないかと考えた。

また、地域指導者が授業に加わることで、学校行事や登下校指導以外の部分でも「地域で子どもを育てる・地域の一員」であるということを推進する場になると考えた。

(3) 取組体制

円滑な指導を保障するため、次のような指導体制を組織し、授業の充実と地域指導者との連携を密に図った。

南陽中学校地域連携推進のための組織



## 2 研究内容及び具体的な研究活動

### (1) 具体的な研究の柱

○国際理解教育の推進と関連させた武道（剣道）の位置付けと授業の充実

○地域指導者との連絡・調整のあり方と地域の教育力の広がり

### (2) 研究の実践

#### ① 国際理解教育との関連

平成 18 年度より、市教育委員会より国際理解教育の研究委嘱を受け、コミュニケーション能力・共生社会・国際人などをキーワードとして研究を進めることになった。同時に従来の現職研修の研究組織の見直しを図り、国際理解教育部会を独立させて、国際教室の充実や地域の方も参加できるポルトガル語教室や韓国語講座を開設した。

国際理解教育については、ただ単に外国と交流活動をするものだという狭義のとらえ方をするのではなく、相手や他国を知り理解を深めることで、最終的には、自己理解・自国理解につなげるものであると共通理解した。

中学生になると、何かと外国の音楽や服装をはじめ他国の文化に興味は向くが、今まで意識しなかった日本文化の味わいやすばらしさに目を向けさせることが国際理解教育の第一歩であると考えた。

また、30 人を超える外国人の生徒が在籍しており、地域においてもブラジルや韓国をはじめ外国の文化に触れる機会が多く、学習展開の選択肢も幅が広がると考えた。



30人を超える外国人生徒への個別日本語指導

#### ② 日本文化体験講座

1年の6月には、武道（剣道・空手道）をはじめ、生け花、着物の着付け、和太鼓、折り紙、和凧づくり、筆づくり、しめ縄づくり、日本料理などの12講座を地域や地域外の教育ボランティアの協力を得て開設した。

武道場では、空手の講座が開かれたが、空手道の考えや基本的な構え・動作を師範と弟子の方から学習した。また剣道の講座では、日本刀のつくり方や美術的な価値について、後半には体育館で剣道の実技を中心に学んだ。空手や剣道は当然知っていたが、直接体験している生徒は少なく、緊張した講座となった。



1年生の日本文化体験講座「豊橋筆づくり」

講座を通して、身近にある日本文化に触れることができた。また、講師の方々も生徒とのふれあいに、表情を和らげていた。

#### ③ 異文化体験講座

2年の異文化体験講座では外国に視野を広げ、ブラジルダンス、カポエラ、インディアカ、ポルトガル語講座、韓国語講座、韓国料理、ブラジル料理、サリーの着付けなどの14講座を開設した。日本の心・精神を大切にした武術に比べて、ブラジルなどの動的な武術やダンスは、生徒にとっては新鮮な体験であるとともに、ブラジルの生徒にとっては自国の特徴を日本の友達に知ってもらう絶好の機会にもなった。また外国人の生徒のなかに

は、得意気に講師の補助をする者もあり、普通の授業にはない明るい表情を見ることができた。

このように、異文化の理解を深めることが、身近にありながら、あまり意識してこなかった日本文化を見直す・再認識する活動になった。武道などの体育的な活動ばかりではなく、折り紙や藁草履作りなど、伝統的な手工芸に関する部分でも、優れた日本文化を再確認した生徒は多い。



小さな講師も加わってのカポエラの講座

#### ④ 日本の伝統武術の見直し

1年の日本文化体験講座を中心とした、伝統的な日本文化への気づき、2年の異文化体験講座での外国文化への広がり、そして再び身近にある日本文化の再認識へと総合的な学習を展開した。



日本文化の再認識、すばらしい日本文化

外国文化に触れることにより、改めて日本文化の歴史や受け継がれてきた作法や技術について理解を深めることができた。2年でブラジルのカポエラを体験した生徒は、

カポエラと精神面の充実を大切にした日本の剣道には、大きな違いがあることを感じ取り、振り返りカードに記録として残した。

#### ⑤ 保健体育科の授業への位置付け

総合的な学習の時間と保健体育科や特別活動の単元を総合的に関連させ、1～3年の体育カリキュラムに武道の剣道を位置付けた。地域連携指導の推進を受け、地域在住の剣道有段者に、日本文化体験講座に引き続き剣道の指導を依頼した。

地域指導者は、警察官の経験があり剣道の有段者である。地域の自治会や健全育成の活動にも積極的に関わっている実績もあり、快く指導を引き受けてくれた。

地域指導者と事前に授業展開について、打合せをしており、保健体育教員とのTT指導をスムーズに進めることができた。普段の体育とは異なり、正座での礼に始まり、礼で終わる授業は、新鮮で緊張した時間となった。そして、一人一人の生徒によりそったきめ細かな実技指導が展開できた。



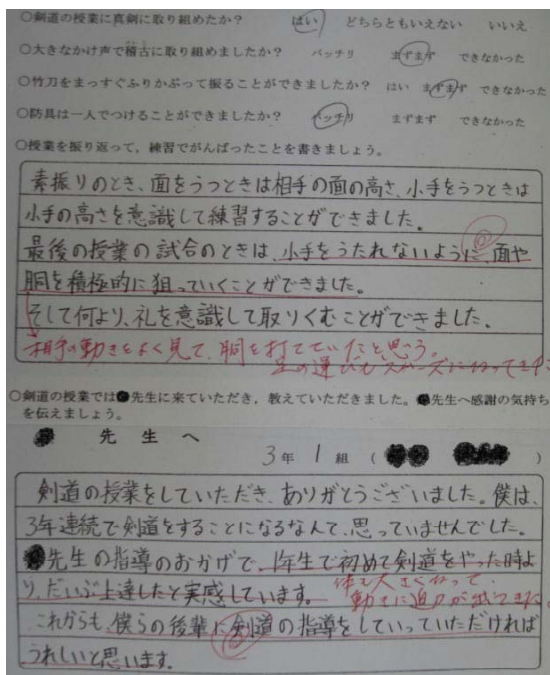
地域指導者の授業では常に、礼に始まる

剣道部の生徒は、授業で「ミニ先生」(助手)となり、打ち込みを受けるなどして、自己存在感を高めることにもなった。

また、地域指導者は、武道の精神面を大切する方で、「相手を思いやる心」を大切にすることが武道(剣道)の基本であることを再三唱え、日本文化の根底を流れる「日本の心」・「武道の精神」を伝えた。



地域指導者と保健体育教員との素振りのTT指導



講師への感謝が書かれた3年生の振り返りカード

### ⑥ 総合型地域スポーツクラブ

地域には、部活動の過熱化や指導者の一貫性を検討して立ち上がった総合型地域スポーツクラブがある。原則として月曜日から土曜日が学校部活、日曜日がスポーツクラブの活動として運営されている。

今回は、保健体育科の剣道に地域指導者というかたちで、地域の方に授業へかかわってもらったが、授業・部活動・総合型地域スポーツクラブの垣根を越えた活動が少しずつではあるが広がってきた。剣道以外にもバレーボールや野球で指導者の交流が始まっている。

### (3) 成果・課題

国際理解教育を総合的な学習の時間を柱とし、保健体育科、道徳、特別活動と関連させて教育課程を編成し実践してきた。常に「自分→他者→社会→自分」のサイクルで、日本文化や保健体育科の武道（剣道）、そして自分への理解を深めてきた。

現在、新学習指導要領の移行期間でもあり、保健体育科の武道指導にも合致する研究となった。

また、従前より言われてきた「開かれた学校」の観点からも地域指導者の教育へのかかわりが、部活動や地域スポーツクラブの指導にも広がりを見せたことが何よりの成果である。

課題としては、

- 地域指導者との連絡・調整の時間の確保
  - 地域指導者の怪我や事故などへの保障の充実
  - 剣道の竹刀、胴着等の体育備品の整備
- などが挙げられる。

### 3 研究成果の普及

今回の地域連携指導の取組により、学校部活だけではなく、地域のスポーツクラブの指導者が、保健体育科の授業をはじめ、学校と地域の垣根を越えて、学校の授業に参加してもらったことは、剣道だけではなく他の種目・領域にも波及するものである。また生徒が専門性をもった指導者から指導を受けることは、「確かな学力」という観点からも保護者の信頼を得る要因となった。

保健体育科だけではなく、他の教科（社会、家庭、国語など）でも地域の力を借りて、より確かな学力を培おうという姿勢が見られてきた。

### 4 今後の展望

地域の方が講師・ボランティアとして学校教育にかかわってもらうことは、学校や生徒に直接触れる機会になり、地域に学校の様子を発信することにもなる。こうした教育ボランティア、地域指導者の広がりは学校としても歓迎する方向にあるが、現実的には人数も少なく、十分に機能・活用できていない。しかし、「地域の子供は地域で育てる」という思いは、しだいに広がりを見せてきている。